医療史跡

水俣病の発見と原因追及

細川　一

2021年は水俣病が公式に確認されてから65年の節目の年である。1956(昭和31)年の5月1日にチッソ水俣工場付属病院長だった故・細川一（1901～1970）医師が「原因不明の中枢神経疾患の発生」を水俣保健所へ届け出たことに因む。

細川は，1901（明治34）年愛媛県三瓶町で生まれ，現在の西予市津布理に生誕地の碑がある（**写真1**）。東京帝国大学医学部に入学し，医師の道を志し博士号を取得する。その後，朝鮮道立順天病院，そして1936(昭和11)年に日本窒素肥料株式会社(昭和25年新日本窒素肥料株式会社・昭和40年にチッソに改名)に入社し，朝鮮半島の阿吾地工場付属病院長に就任している[1)]。

1937(昭和12)年に大洲市細川家の養子になっていたが,応召されビルマ戦線に赴く。敗戦と同時に帰国し,1947(昭和22)年に水俣工場付属病院長に就任した。

細川は，手足のしびれや言語障害等の症状に苦しむ患者たちを診て究明に乗り出す。1957（昭和32）年に工場廃液をネコに与える実験を開始。1959（昭和34）年10月，ネコ400号実験において，ついに水俣病の症状が現れ衝撃を受ける。「ネコの実験を本格化させたい」と申し出るが，チッソ幹部から「わが社の見解に合わない」と拒絶される。

そして細川は研究の結果，1962（昭和37）年，廃液中のメチル水銀が水俣病を発症させることを突き止めたのち,26年間勤めたチッソを退職する。退職後は,故郷の三瓶に戻り，三瓶町（現・西予市）の三瓶病院で診療にあたった[2)]。

「水俣病の公式認定」は1968年だが，実際にいつ発生したか，今も時期は特定されていない。1959（昭和34）年，原因はチッソ株式会社が水俣の海に排出した有機水銀であることを熊本大学医学部の調査によってつきとめられてもなお，国と自治体はその拡散防止と被害者の救済に立ち上がることはなかった。

1965（昭和40）年に新潟で第二水俣病が発生した際には,研究チームの一員となり現地調査に参加した。真相を明かせないまま60代で引退した細川は，第2の水俣病を新潟の現地で目の当たりにして，患者側に寄り添う決意をする。「公害」という言葉もなく，会社の利益を最優先させた高度経済成長時代に，会社内部から公害の原因を明らかにした細川から筆者らが学ぶことは何なのか。現在，環境倫理学的テーマとなっている「予防原則」について，既に1969年にその必要性を示唆していた細川メモがある。戦時中から世話になったチッソへの恩義と，医師としての良心のはざまで苦悩する。しかし現実の被害はあまりにも重い[1)]。

写真1　細川一博士生誕地の碑（愛媛県・西予市三瓶町）

写真2　水俣病慰霊の碑（熊本県・水俣湾親水緑地）

1970（昭和45）年，肺がんのため東京大塚にあった癌研究会付属病院に入院中，水俣病裁判の証人として臨床尋問を受け，ここで隠蔽されていたネコ400号実験について証言した。水俣病患者側の「勝訴」が宣言されるのは細川の死から3年後，1973（昭和48）年3月20日のことであった。細川の墓は，大洲市法華寺にある。「水俣病発見者　細川一ここに眠る」の墓碑銘は新潟水俣病弁護団長 坂東克彦氏の書による。

2021（令和3）年5月1日に，水俣湾の埋め立て地では犠牲者慰霊式が開かれる（**写真2**）。

参考資料

1）愛媛県生涯学習センター：
https://www.i-manabi.jp/system/regionals/regionals/search
2）水俣市立水俣病資料館：
https://minamata195651.jp/pdf/kikaku_pdf/hosokawa_syushi.pdf

（日本診療放射線技師会　諸澄邦彦）